

國學院大學學術情報リポジトリ

國學院大學図書館所蔵『咸陽宮』の解題と翻刻

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 針本, 正行, 山本, 岳史 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000640

國學院大學図書館所蔵『咸陽宮』の解題と翻刻

針 本 正 行
山 本 岳 史

はじめに

國學院大學図書館に絵巻物の体裁を持つ『咸陽宮』（國學院本）が収蔵された。『咸陽宮』は、詞書と絵を持つ穂久邇文庫蔵『かんやう宮』（上・下二軸、穂久邇本^①）、専修寺蔵『かんやう宮』（上・下二軸、専修本）、二松學舎大學附属図書館蔵『かんやう宮』（上・下二軸、二松本）、ニューヨーク公共図書館スペンサー・コレクション蔵『かんやう宮』（上・下二軸、スペンサー本^②）などの存在が明らかになっている。『咸陽宮』の本文については、大きく二系統あり、一つは、穂久邇本、専修寺本系統であり、二つは、二松本、スペンサー本系統である^③。國學院本の生成過程を推定するために、國學院本と他の四本との本文の相違を示し、さらに、挿絵の構図、詞書書写者の特徴についても、現在、國學院大學図書館に所蔵されている物語絵巻との比較検討を通して述べてみたい。

なお、國學院本『咸陽宮』の翻刻にあたっては、山本岳史氏の協力を得た。

【書誌】

二軸。表紙は紺地金糸草花二重亀甲繋ぎ文様金襴緞子、料紙は鳥の子紙で下絵は金泥草花文様。外題「咸陽宮 本(末)」とある。紙高は三四・一厘。上巻は、長さは凡そ二二・二一米。挿絵は六図(内長大図が二図)。下巻は、長さは凡そ二一・八六米、挿絵は六図(内長大図が二図)。箱蓋中央に、墨書で、「咸陽宮書畫々巻 上下」との貼紙。箱蓋裏に「戊申季秋調筐 象西卓齊道人藏」との打ち付の墨書あり。奥書はない。製作年代は、絵巻の体裁、本文の料紙、詞書書写者などの検証により、江戸時代前期の寛文・延宝期と思量される。〔貴四三三〇〕四三三二一

一、國學院大學図書館所蔵『咸陽宮』の本文

本節では、國學院本(略号「國」)の本文と、スベンサー本(略号「ス」)、一松本(略号「松」)系統、及び穗久邇本(略号「穗」)、専修寺本(略号「専」)系統の本文との相違を導くために、それぞれの系統の巻頭と巻末の本文を比較検討したい。

(一) 『咸陽宮』上巻冒頭の本文

- 1 國 それつらく三皇五帝のいにしへをおもふに仁をもつて家とし礼をもつてしとねとし天子其なかに座して
- 1 ス それつらつら三皇五帝のいにしへをおもふに仁をもつて家とし禮をもつてとねとし天子その中に座して
- 1 松 それつらく三皇五帝のいにしへを思ふに仁をもつて家とし禮をもつてしとねとし天子その中に座して
- 2 國 みつから徳をおさめまつりことをおこなふて更にわたくしなくめくみを天下にほとこして四海の民をあはれみ
- 2 ス みづから徳をおさめ政・ことをおこなふて更にわたくしなくめくみを天下にほとこして四海の民をあはれみ

- 2 松 みつから徳をおさめまつりことをこなふて更にわたくしなくめくみを天下にほとこして四海の民をあはれみ
- 3 國 給ふ此・ゆへに天たうこれをかんにして・日月星辰そのめぐりをたかへすうふうせつその時をうしなはず
- 3 ス 給ふ此・故・に天道・是・を感・じては日月星辰そのめぐりをたかへす雨露風・雪・その時をうしなはず
- 3 松 給ふこの故・に天たうこれをかんにして・日月星辰そのめぐりをたかへす雨露風・雪・その時をうしなはず

(二) 『咸陽宮』上巻末尾の本文

- 1 國 ましてやしんのいきほひはわしのごとくとらのことしゑんはよはくしてすゝめのごとくねずみのごとしはなは
- 1 ス ましてや秦・のいきほひは鷲・のごとく虎・のごとし燕・はよはくして雀・のごとく鼠・のごとしはなは
- 1 松 ましてや秦・のいきほひはわしのごとくとらのことしゑんはよはくしてすゝめのごとくねずみのごとしはなは
- 2 國 たほろひやすかるへし爰・に此國・に田光先生とてかくれなきつはものあり智恵ふかうしてこゝろたけくはか
- 2 ス たほろひやすかるべし爰・に此國・に田光先生とてかくれなきつはものあり智恵ふかうして心・たけくはか
- 3 國 りことありてわたくしなし此・上・にはちからなし・此人をめしてともにはかりことをめくらし給へとてすな
- 3 ス りことありてわたくしなし此・上・にはちからなし・此人をめしてともにはかりことをめぐらし給へとてすな
- 3 松 りことありてわたくしなしこのうへにはちからをよはず此人をめしてともにはかりことをめくらし給へとてすな
- 4 國 はちてんくはうせむしやうをよひませたいしたんすてに礼・義きをいたしたいめんをとげねんころにかたらひ
- 4 ス はち田光先生・をよびませ太・子丹・すでに禮・儀をいたし對・面・をとげねんころにかたらひ
- 4 松 はち田光先生・をよひませ太・子丹・すてにれいきをいたしたいめんありてねんころにかたらひ
- 5 國 つゝ頼むよしをその給ひける

5ス ・ 頼むよしをぞの給ひける

5松 ・ たのむよしをその給ひける

(二) 『咸陽宮』下巻冒頭の本文

1國 ・ ・ ・ ・ でんくわうせむじやうや、ありて申ていはくそれ騏きといふ馬はそのさかりなる時には一日に千里を

1ス 該当本文ナシ

1松 さるほとに田・光・せんしやうや、ありて申ていはくそれきといふ馬はそのさかり成・時には一日に千里を

2國 ゆくといへとも年おひてをとろへぬれば驚馬どばにたにをよはすといへりわれむかしわか、りし時は弓をひきほこを

2ス 該当本文ナシ

2松 行・といへとも年老・ておとろへぬればとはにたにをよはすといへりわれむかしわか、りし時は弓を引・ほこを

3國 ふるに敵てき・をうつことやすかりけりいまはよはひかたふきちからをとろへ精せい・きえてはかりことうすしされとも

3ス 該当本文ナシ

3松 ふるにてきをうつことやすかりき・今・はよはひかたふきちからおとろへせいきえてはかりことうすしされとも

4國 わかおもふ事あり爰に荆軻けいかといふものありもとは衛ゑい・の國の人なり今この國・にうつりきたりつねにこのみて書

4ス 該当本文ナシ

4松 我思ふことありこゝに荆軻といふものありもとはえいの國の人なり今此・くに、うつり来りてつねにこのみて書

5國 をよむ又高漸離かうぜんり・といふものありよく筑ちく・をうちてかくれなき名人なり筑ちく・は琴ことに似て絃をあり竹たけをもつてこれ

5ス 該当本文ナシ

5松 をよむ又かうせんりといふものありよくちくをうちてかくれなき名人なりちくは琴ことにて絃をあり竹たけをもつてこれ

(四) 『咸陽宮』下巻末尾の本文

- 1 國 始皇帝大・にいかりて・王・・翦・李信・などいふ將軍に数百万の兵・・をそへてゑんの國・にせめよす・る
1ス 該当本文ナシ
- 1 松 始皇帝大きにいかり給ひくわうせんりしんなどいふ將軍にす百萬のつはものをそへてえんのくに、さしむけらる
2 國 太子丹もちからなくよきつはものをよほしてりやうとうといふ所・・にいだしあはせ・・ふせきた、かふと
2ス 該当本文ナシ
- 2 松 太子丹もちからなく・・つはものをよほしてりやうとうといふところへさしつかはして・ふせきた、かふと
3 國 いへ共・つるにうちまけてゑん水のほとりにしてうたれ給ひけりかの高漸離・・は名をかへてかくれるたりしを
3ス 該当本文ナシ
- 3 松 いへともつるに打・まけてえん水のほとりに・てうたれ給・けりかのかうせんりは名をかへてかくれるたりしを
4 國 尋・・いたし筑・をうつ事・の上手とて馬糞にふすへて目を・つぶし始皇のそはにゆるしをかれつねは筑・をう
4ス 該当本文ナシ
- 4 松 たつね出・しちくをうつことの上手とはふんにて目をふすへつぶし始皇のそはにゆるしをかれつねはちくをう
5 國 たせて聞・しめしけるをなをも始皇をうらみつ、筑・の首・・になまりを入て是にてうちころさんとしければ
5ス 該当本文ナシ
- 5 松 たせてきこしめしけるをなをも・・うらみて・ちくのかしらになまりを入て是にて打・ころさんとしければ
6 國 それもうちはつしてころされぬ・・天運・・つよき始皇帝のくわほうの程・こそめてたけれ
6ス 該当本文ナシ

6松 それもうちはつしてころされぬ只今天うんのつよき始皇帝のくわほうのほどこそめてたけれ

では、校合本文(一)、(二)をふまえて、國學院本の本文の特徴を確認したい。

國學院本、二松本、スベンサー本の上巻冒頭は、「それつらく三皇五帝のいにしへをおもふに仁をもつて家とし礼をもつてしとねとし天子其なかに座してみつから徳をおさめまつりことをおこなふて更にわたくしなくめくみを天下にほどこして四海の民をあはれみ給ふ此ゆへに天たうこれをかんにして日月星辰そのめぐりをたかへすうろふうせつその時をうしなはず」(國學院本)と、皇帝の威徳を称揚することからはじまる。秦の始皇帝の王権の内実を冒頭に示すことにより、咸陽宮を舞台とする始皇帝物語の始発を形成するものとなっている。

それに対して、穂久邇本は、「そもそも咸陽宮と申は秦の始皇帝ののみやこ也内裏のたかさは三里有城のめぐりは一萬八千三百八十四里とそ聞えしそうしてしんたんこくのひろさは東西は五萬餘里南北は四萬九千里なりくくの數は四百餘しうこほりのかすは一萬八千よこほり也」と、秦の始皇帝が造営した咸陽宮の威容を述べ、「かくのことくくわうたむへんのさかひなりしかともむかしは人の心すなほにして上あきらかにして下にくらさりしかはをつから天下とこしなへにしてたみに下までもゆたかにありしかとも中ころとなりてはしやかうをもつはらとするゆへに君かたましく臣いつはりてしんきにそむきれいせつをみたりけるほとに國やうやくみたれそめてたみをつからこゝろくになりにけり」と、現在の中国の騷亂の状況を語り、この後に展開する始皇帝物語の導入の条となっている。また、専修寺本は、「むかし大こくにかんやう宮と申ていかめしき大里侍けりこれはしんのかうこうと申人のはしめてつくり給ひし宮こなりあすいのきたきうそうさんのみなみにありしゆへにかんやう宮とは申とかやひかしにはかんこくはんとてけはしきたにをようかいとしみなみにはかうさんとてかゝたる山ありそれすなはちてんふの地なり」と、咸陽宮の地が地理的に天賦の場所であることを語り、それによって、始皇帝が、「このところにみやこをつくり天下の

ゆうしふんしやをまねきあつめはかりことをめくらしまつりことをあらためくにをとましたみをさかやかし六くをほろほして天下をうは、んとそたくまれける」と、要塞の地をもつて天下を治める策を画したと語つて終わっている。

國學院本、二松本、スペンサー本の上巻末尾は、「ましてやしんのいきほひはわしのことくところのことしえんはよはくしてすゝめのことくねずみのごとしはなはたほろひやすかるへし爰に此國に田光先生とてかくれなきつはものあり智恵ふかうしてこころたけくはかりことありてわたくしなし此上にはちからなし此人をめししてともにはかりことをめくらし給へとてすなはちてんくはうせむしやうをよひよせたいしたんすてに礼義をいたしたいめんをとけねんころにかたらひつつ頼むよしをその給ひける」（國學院本）と、始皇帝を欺いて燕國に帰国した太子丹が、智者田光先生を宮廷に召し出し、礼を尽くして、始皇帝謀殺の計画を依頼する条で終わっている。

それに対して、穂久邇本は、燕の國に帰参した太子丹が母親と対面した後、「かくて太子丹は大臣をめしておほせけるは我しんのとらはれとなつてきうよにひろうするなどのたまへはてんくはうこのよしうけ給はりこの事世にもれなんときはかならず我をうたかひたまふへししかしちうめいをすてゝ君のこゝろをやすめたてまつらんにはとていしやうにおりくたりすもゝの木にかしらをあてゝうちくたきしかいしけるこそあへなけれ」と、太子丹が、秦を逃げ出す策を授けた田光先生に「きうよにひろうするな」と言つたので、疑われた田光先生が李の木に頭をあてて自害した条となつている。また、専修寺本は、太子丹が田光先生の計略を荊軻に伝え、それを受けた荊軻がこの次第を燕國に逃れていた秦の樊將軍に告げたところ、「さて太子たんけいかをめしてその事をくはしくかたり給へはさうなくりやうてう申てけりやかてはんえきかしゆくしよにいたりてたいめんし申けるはしくはうていより御へんのくひをとりてたてまつるへきよしせんしによつて太子のおほしめしたつ事ありいかんかすへきとありければはんえき聞て大きによるこひわれふせうの身をもつていかてかしくはうにちかつき奉りあたをほうすへきや生前のめんほくかゝるおほせを

かうふるこそさいはひなれといひてやかてつるきをぬきわれとわかくひをかきおとしけいかにそ渡しけるあはれにたけきありさまなるへし」と、樊將軍がみづからの首を切り、荊軻に差し出した条となっている。

次に、校合本文(三)、(四)をふまえて、國學院本の下巻の本文の特徴を確認したい。

國學院本の下巻の冒頭は、「でんくはうせむじやうやゝありて申ていはくそれ騏きといふ馬はそのさかりなる時には一日に千里をゆくといへとも年おひてをとろへぬれば驚馬どばにたにをよはすといへりわれむかしわかゝりし時は弓をひきほこをふるに敵てきをうつことやすかりけりいまはよはひかたふきちからをとろへ精せいきえてはかりことうすしされともわかおもふ事あり爰こゝに荊軻けいといふものありもとは衛ゑいの國の人なり今この國にうつりきたりつねにこのみて書をよむ又高漸離かうぜんりといふものありよく筑ちくをうちてかくれなき名人なり」と、田光先生が太子丹に自身の老いを述べ、元は衛國出身の荊軻を推挙する条文となっている。

しかし、上巻では、國學院本と同系統であつたスペインサー本には該当する本文がなく、「かゝりしところにかうう百萬騎の兵をしたがへかんこくの關にうちいらんとしけるに關の戸かたくどちてかううをいれたてす項羽かうう大きにかりて當陽君たうやうくんと云將軍しやうくんに二十萬騎をさしそへかんこくの關をうちやぶりかんやうきうにせめいりければ秦しんのつはものかううの軍勢せいをふせぎてしばらくたゝかひけれともかなはずしてみなちりくゝに成にけりかううかつにのりてせめつゞみをうつてをしよせかんやう宮にみだれいりてすなはち火ひをかけたりければかんやう宮四ほう三百七十里につくりならべたる宮殿くうてんろうかく一どうにもえあかりひとつものこらずやけくづれてその火九十日までできえざりけり秦の三世子嬰皇帝せいしえんも此時にあたつてかううがためにころされ給ひて秦の代たちまちにほろびけるこそあはれなれ」と、項羽が百萬騎の大軍により函谷関を開き、咸陽宮に入りこみ、秦の軍勢を滅ぼして咸陽宮を焼き尽くしたことが語られている。咸陽宮の歴史物語の一つを再現しているといえる。スペインサー本の下巻は、上巻の始皇帝物語ではなく、「咸

「陽宮物語」を志向しているのである。¹⁾

それに対して、穂久邇本は、「去ほとに太子はけいかをちかつけ給ひていかにもして秦のくにをほろほしくわいけいのはちをきよめんとしたまふけいか大臣しはらくあんして申されけるはしんはすてに萬こくをしたかへなひけていきほひを八くはうにをよほせり今えんのちからをもつてかれとたたかひをなさん事おそらくはたうちうおのをもてれうしやをさへきるにことなるからす臣ひそかにひとつのはかりことをもてしくはうていをうかかひたてまつらはもしほんまふをとくこともやるへきと申せは太子きこしめしてそのはかりことはなに事そとどひ給ふけいかこたへていはくこのくにはんえきといふつはものありこれはしんのくににてかたきをうちたるものなりしくはてういけきりむまし／＼てはんえきかくひをとりてたてまつるへきよし四かいにせんしをくたし給ひしかは身のをきとろなくしてこのくににけかくれ侍るもの也かのはんえきかくひをもてはこにおさめはこのそこにせんひつのつるきをかくしをきえんのくにのさしつのはこともかなからすちぎにたいめんあるやとの給ふそのときうかかひよつてくはうていをとりこめたてまつりかいしたてまつらむと申ければ」と、太子丹に対して、荊軻が始皇帝謀殺の策として、秦の樊將軍の首を差し出し始皇帝の信頼を得て帝に近づき、燕国の地図を入れた箱の下に剣を隠しておくことなどを提案した条となつてゐる。また、専修寺本は、「さるほとにけいかははんえきかくひもたせてかへりけり太子にささけたてまつりけり太子大きにかんし給てさらはいそきかんやう宮にちさんせよとてしゆのはこにおさめられるつきにえんのくにのさしつをうつしたるほうていをは玉のはこにおさめ同じくけんけいをあひそへそのしたにせんひつといふつるきをかくし入られたりさてさんたいにをよんでさしつのはこをはけいかちさんすへしくひのはこをはしんふやうささけもつへし」とあり、穂久邇本と本文は異なるものの、同趣旨の物語が語られている。

國學院本の下巻の末尾は、「始皇帝大しくわうていにいかりて王翦わう李信などいふ將軍に数百万の兵をそへてゑんの國にせめよす

る太子丹もちからなくよきつはものをもよほしてりやうとうといふ所にいだしあはせふせきたたかふといへ共つるにうちまけてゑん水すいのほとりにしてうたれ給ひけりかの高漸離かうぜんりは名をかへてかくれぬたりしを尋ねいたし筑をうつ事の上手とて馬糞ばふんにふすへく目をつぶし始皇のそはにゆるしをかれつねは筑をうたせて聞しめしけるをなをも始皇をうらみつつ筑の首になまりを入て是にてうちころさんとしければそれもうちはつしてころされぬ天運つよき始皇帝のくわほうの程こそめてたけれ」と、始皇帝が燕の太子丹の謀反に怒り、燕国を「えん水」で攻め滅ぼした後に、筑の名人として正体を隠して始皇帝に仕えていた高漸離かうぜんりが鉛をしくんだ筑の首で帝を殺そうとしたものの失敗に終わり、始皇帝の「天運の果報」を賞賛して終焉している。

それに対して、穂久邇本下巻末尾の本文は、「さてしくはうていかのはしらに立しつるきをぬかせてみ給へはさいしやうのつるきにりうやんとめいをしるしたりこれすなはち楚王はくやにおほせてうたせ給ひしゆふけんみけんしやくか口にふくんでそわうのくひにふきかけ父のあたをほうせしつるきなりこのつるきえんのくに、と、まつて太子丹のたからとなれりしかるに太子たんうんめいきはまるゆへにつるきとられあまつさへいのちをほろほしてくにをもうは、れたまひけりしくはうていはこのつるきをえたまひてのちいよいよ天下おさまりなひきしかは子孫萬里につたへてうほうとすへしとよるこひ給ふ事かきりなかりけり」と、柱に刺さつていた謀殺に用いた剣の銘から眉間尺であることが分かり、この剣の伝承を語り、その後、天下が治まったと語つて終焉している。また、専修寺本は、「しよふくといへるたうしかたはらに侍しか御まへにす、み出てあれこそせん人のすみ候なるほうらいはうちやうえんしうといふ三つのしまにて候と申すみかと此よしきこしめしほうらいの嶋にはふらうふしのくすりありといふはまことかとはせたまへはさん候かのしまにはふらうふしのくすりをふくし候ゆへちやうせいをたまち候と申すみかとの御心には一てん四かいの主として万せうのほうゐをたまち給ふといへともとよりうたいの御身は御心にまかせぬことを

ふかくなげかせ給ふなれはかのくすりをえてちやうせい万せいをたもたはやおほしめしつゝ、やかてしよふくをかの嶋につかはしてくすりをもとめさせらるへしと也ほうらいといふしまはむかしよりをとにのみ聞いていまためにみたることなししかれともありのまゝにそうし奉りぬれは今たゝとかく申ことはなくしてすてにしよふくはほうらいのしまにおもむきけり是かためにれうとうけきしゆの舟をつくりとうなんくはんちよとてとしいまた十さいはかりなる男子女子をえらひくゝて三千人舟にのせたりそのほかきんくゝしゆきよくさんかいのちんふつこくとのくわしを山のことくにつみかさねたりにしきのともつなをときかつらのかちを立てしゆんふうにほをあげふなはたをなんかいのにしにたたきつゝまんくゝたるうなはらにこきいてたり（挿絵第十三回）えんすいはうくゝとしてもとむるに所なし風かうくゝとしてまなこをうかちぬれはほうらいをみすはあへてかへらしといひしとうなんくはんちよもいたつらに舟のうちにておいぬらんとそきこえける」と、徐福による、仙人の棲む蓬莱山にあるという不老不死の薬の語りや、龍頭鶴首の舟の由来譚の語りなど、蓬莱信仰物語という形で閉じられている。

以上のように、『咸陽宮』上巻冒頭及び巻末の本文校合をふまえると、國學院本『咸陽宮』の上巻は、二松本、スペンサー本系統に属するものである。下巻の本文は、國學院本と二松本とは一致しているものの、スペンサー本は異なる本文を有している。また、穂久邇本、専修寺本は、國學院本と「咸陽宮」を舞台としている点では共通するが、系統が異なるというよりも、それぞれ別の作品というべきものかもしれない。國學院本・二松本と、穂久邇本・専修寺本という二系統は、親本（祖本）から分かれて、書承伝承や説話群の吸収を経て系統化された物語絵巻群を生成したというものではないということである。江戸時代前期に制作された國學院本『咸陽宮』をはじめ、穂久邇本、専修寺本、スペンサー本、二松本『かんやう宮』は、浅井了意などのような仮名草子作家による新作といえるものではないか。すなわち、國學院本『咸陽宮』や國學院大學図書館に所蔵されている『舟のりとく』、『呉越絵』も、江戸時代

前期において、ある絵草紙屋が新たに制作したものと思量されるのである。

二、『咸陽宮』の挿絵の構図

本節では、國學院本『咸陽宮』の上下巻、それぞれの六図の挿絵について、当該場面に相当する本文を引用し、場面の要旨と、人物の配置を確認した上で、國學院本『咸陽宮』の挿絵の構図の特徴を示したい。

(一) 上巻の挿絵の構図

第一図は、秦の始皇帝が「政」と称された十三歳で帝位に即いた後、天下をまとめる戦の評定をしている場面である。本文、「秦のさうしやうわうの子ゐみなをはせいとそ申けるとし十三にして位につきしんわうとなり此年すてにはよくかんちうの地をうちとり周の世をうはひなを天下をひとつにあはせておさめんことをはかり兵をまねきあつめていくさのひやうちやうはかりことのしなく夜を日につきておもひたくらみ給ふこゝろのうちこそはるかなれ」に相当する。本図は二紙分の長大図で、右の画面に戦の評定をする始皇帝の様を描く。第二図は、始皇帝が成長するにつけて、諸国の城を攻め滅ぼす場面である。本文、「しんわう御としの長するにしたかひて御心まずくたけくわたらせ給ひ給呂不韋といふものを大臣とし李斯といふものを舍人としもうかうわうきへうこうわうせんなどいふつはものに将軍の官をなし給ひて軍兵を相そへ諸國につかはして城をかこみいくさをいたしせめたかふてうちしたかへしんわうの手にきふくする事その数をしらす」に相当する。本図は二紙分の長大図で、右の画面に城を攻め込む秦王軍を、左画面に城を守る兵士を描く。第三図は、始皇帝が儒者を弾圧し、天下の書籍を焼き尽くした焚書坑儒の場面である。本文、「いまの世のまつりことのいにしへにたかふことをそしりにくみけるを始皇帝

きこしめして大にいきり給ひた、これ書籍の世にある故なりとて三墳五典史書経傳すべて天下の書籍をとりあつめ三千七百六十餘巻一部をも世に残さすことくやくすて」に相当する。画面右上に、書籍が兵士により焼かれる様を、中央手前に書籍が焼かれることを嘆く儒者を、左画面に、それらの様子を見ている始皇帝を描く。第四図は、秦の始皇帝が政事を行う阿房殿を描いた場面である。本文、「庭には四季のけいをうつし池にけきしゆの舟をうかへ玉のいさこえいてつし花とはなどは色をあらそひえたと枝とはひかりをあはせりんほうつらなりくわえうしけりかいたつきよくしやしなくにわかれたり後宮の女御かういそのかす又おほくしんわうのあいかうをまちててうせられんことをもとむ」に相当する。右画面に、宮門をくぐり宮殿に参上す官僚を、画面中央には庭の橋と池に浮かぶ鶴首の舟を、画面左には始皇帝とその女御らを描く。第五図は、始皇帝が人質である太子丹を燕國に帰す条件として、角が生えた馬と頭の白い鳥の現出を条件としたので、太子丹が天道に奇特を祈念したところ、現実となつた場面である。本文、「太子丹にうれへなけき天にあふきてかなしみ地にふしてはまみたをたれつ、ねかはくは角おひたる馬を生しかしらのしろきからすをあらはして故郷にかへして給はれとかんたんをくたきていのられたり天道もさすかにかうくの心さしをかんし給ひけるにや角おひたる馬ありて宮中にきたりかしらのしろきからすありて庭上のうへ木にすみ侍りけり始皇帝このきとくにおとろきりんけんかへらさることはりにまかせてすなはち太子丹を故郷にこそかへされけ」に相当する。右画面の樹木の頂に頭の白い鳥を、中央に角が生えた馬を、左画面に庭に現出した奇徳に驚く始皇帝を描く。第六図は、故郷の燕國に帰参した太子丹が、始皇帝の仕返しを怖れて、智者の田光先生と策を講じる場面である。本文、「ましてやしんのいきほひはわしのことくとのことしえんはよはくしてす、めことくねずみのごとしはなはたほろひやすかるへし爰に此國に田光先生とてかくれなきつはものありちゑふかうして、ろたけくはかりことありてわたくしなし此上にはちからなし此人をめしてともにはかりことをめくらし給へとてすなはちてんくわうせむし

やうをよひよせたいしたんすてに礼義れいぎをいたしたいめんをとけねんころにかたらひつゝ頼むよしをその給ひける」に相当する。右奥に太子丹を、手前に頭を垂れる田光先生を描く。

(二) 下巻の挿絵の構図

第一図は、太子丹に疑われた田光先生がみづからの首を荊軻の前で落とす場面である。田光先生は、太子丹に疑われているのではないかと判断して、生きている甲斐がないと自ら死を選びとるのであった。本文、「太子丹われにつけていはく此事は國の大事なりあなかしこ又よの人にもらすなといへりこれは太子丹のわれをうたかふ所なりわれうたかはれて又なにの生たるかひあらんわれ死して荊軻か心をはけまさん何ち太子丹に行てわれすてに死せりこれ世にもらさるゝところのしるし也と申せといひてみつからくひをかきおとしてむなしくなりけるこそあはれなれ」に相当する。右画面に、机に向かつて座っている荊軻を、その前で、劍を右手に握り自身の首を切ろうとしている白髮の田光先生を描く。第二図は、荊軻が太子丹に田光先生の死を告げた場面である。田光先生が自ら首を切ったことを聞いた太子丹は、自身の發言を契機とした出来事でもあり、激しく嘆くのであった。本文、「かくて荊軻けいこはわか家をたち出て、太子丹のもとにゆきて對面たいめんをとけたりさても田光先生はそれかしのもとに來り君のもらすなどのたまひけること葉のすゑもはつかしくさこそは我をうたかひおほすらんそれ人の世にあるものはおしむところは名にあり人にうたかはれ侍りては世になからへて何のかひあらんいまわれ死して君の心をさんせんといふてみつからくひはねて死せりとかたりければたいしたんだにおとろきなけき給ひ」に相当する。右画面奥に、椅子に座る太子丹を、その手前で田光先生の死の経緯を説明する荊軻を描く。第三図は、太子丹が荊軻を接待した場面である。太子丹は、秦の始皇帝を謀殺するために荊軻が立てた策を聞き、荊軻こそ燕の國の大事を任せるにふさわしい者と認め、宮廷に招きいれ、女御更衣を集わせ、荊軻に黄金の玉を与えるのである。本文、「ともかくも國の大事はまかせ侍へらむとてそれよりは

けいかをもてなしかしつき給ふ事さらにそのたくひなし禁中きんちゆうの上殿じやうでんにいざなひれつつ太子丹みつから大牢たいらうのそなへをと、のへ山海の珍物をそろへみめよき女房あまたあひそへ榮えようえいくわにほこらし荆軻をなくさめ給ひけりある時荆軻あそひのためにとうくうの庭に出て池のほとりにおもむきけり太子丹おなしく出給ふあまたの女御かうい御ともめにめしつれらる池の中に大なる龜のうかひ出しをけいかすなはち磔つぶをとりあけてうちけるを太子丹み給ひてやかてこかねの玉を取りよせみつから荆軻にさ、けあたへ」に相当する。本図は二紙分の長大図で、中央右に太子丹を、その左に荆軻を、左画面に太子丹の妻妾を、さらに饗応のための食物を奉仕する侍女を描く。第四図は、秦の樊將軍がみづからの首を切り、燕國の荆軻に差し出した場面である。秦の樊將軍は、燕の荆軻から秦の始皇帝を謀殺する計画を聞き、自身の首を荆軻に託すのである。本文、「こゝにはんよきみぎのかたをかたぬきひたりの手をもつて右のうでくびをにきりゐたけたかになりていはくこれこそそれかしかよるひる思ひめぐらしはをくひしはりむねをこかすところなれしんわうをたにころさはわか命はおしからすとてみつから劍をぬきくひかきおとしてこれをさ、け荆軻にこそあたへけれ」に相当する。下巻第一図の田光先生の首を切る場面と対照的に、左画面に荆軻を、その右側で、右手に劍を持ち、左手で髪を毛を引つ張り自身の首を切ろうとする秦の樊將軍を描く。第五図は、荆軻が樊將軍の首と燕の地図を持ち、十三歳の刺客秦舞陽と秦に向かう場面である。太子丹は易水のほとりで白装束に身を包み、荆軻と舞陽を見送ることとした。本文、「太子丹をさきとしてかうせんり以下の人、その事をしりたるともからをのく、しろきしやうそくして燕の國のみなみの易水のほとりまで道祖たうそのをくりをいたされたり酒もなかななる時に高漸離座を立て筑ちくをうつ荆軻けいか和わして哥えんをうたふに變徴へんちのてうしをしらふるその哥えんにはく 風蕭々かせせうとして易水えきすいさむし壯士さうし一たびさりて又かへらず」と此歌うたひてしはらく筑ちくをうちけれ」に相当する。本図は二紙分の長大図で、中央に軟障をめぐらし、右画面に兵士を、画面中央に白装束の太子丹を、その左で頭を垂れている荆軻を、その左には十三歳の刺

客秦舞陽⁵を、さらにその左隣に筑を打つ者を描く。第六図 荊軻と秦舞陽が秦の始皇帝を殺そうとする場面である。しかし、二人が始皇帝の夫人の琴の音に心を奪われたので、秦王は難を逃れることとなる。本文、「しんわうの御前にまいりてはんよきか首をけんさんにいれ地圖をひらきてみせたとつるところに箱のそこにこほりのことくなるつるきのありけるをしんわう御らんしてやかてにけんとし給ふところを荊軻御袖をむすとらへ」首のけんをむねにさしあてつゝ、えんわう我をつかはしてしんわうのかすめとりし地をかへしてしよこうのうれへをはらはしめんとす(略)」に相当する。本図は二紙分の長大図で、画面中央に背を向けて始皇帝の首に刀を突きつけている荊軻を、始皇帝の背後に秦舞陽を、左画面奥の御簾の中に琴を弾く后を描く。

三、國學院本『咸陽宮』と絵入刊本『平家物語』(巻五)「咸陽宮」の挿絵の構図

本節では、國學院本『咸陽宮』の挿絵の構図と國學院大學所蔵絵入刊本『平家物語』巻五「咸陽宮」のそれとを比較することを通して、江戸時代前期に制作された絵入物語絵巻と明暦・寛文期に刊行された絵入刊本との生成過程について思考したい。

國學院大學図書館には、複数の絵入刊本『平家物語』が収蔵されている。その中で、明暦二年版、寛文十二年版の「巻五」に「咸陽宮」の挿絵がある⁶。明暦二年版の「咸陽宮」の構図は、一丁の「オモテ・ウラ」相当分で、前半に、始皇帝の危機を察知した七名の武士が槍を持って疾走する図が描かれ、後半には、画面右手前、屏風の内で、椅子に座る始皇帝の胸を左手でつかみ、右手の剣を始皇帝の首に当てている荊軻と、左手で始皇帝の胸を押さえ、右手の剣を始皇帝の首に当てている秦舞陽とが描かれている。また、画面左手奥には、花陽夫人が琴を弾いている図が描

かれています。本文、「王にちかつき奉りゑんのさしづならひにはんえき首を見参に入る所にさしづの入つたるひつそこに氷のやうなる劍の有けるを始皇帝御らんじてやかてにげんとし給へはけいか御袖をむすとひかへ奉り劍をむねにさしあてたり今はかうとそみえたりける数万の軍□は庭上に袖をつらぬといへともすくはんとするに力なしたたこの君きやく心にかされさせ給はん事をのみ嘆かなしみあへりけり始皇帝我にさんじのいとまをえさせよ後の琴の音を今一度聞んと宣へはけいかしはしはおをかしも奉らず始皇帝は三千人の后をもち給へりその中に花やう婦人とてらびなき琴の上手おはしき凡この後の琴のねを聞はたけきものふのいかれる心もやはらき飛鳥も地におち草木もゆるく斗也いはんや今をかぎりのゑいぶんにそなへんとなく／＼ひき給へばさこそはおもしろかりけめいかも首をうなたれ耳をそばたてほとんどほう臣の心もためみにけりその時后はしめてさらに一曲を奏七尺の屏風は高くとも其おどらはなとかこえざらん一條の羅こくはつよく共ひかなどかたえざらんとぞひき給ふけいかは是を聞しらず始皇帝は聞き知りて御袖を引きつて七尺の屏風をおとりこえあかがねの柱のかけへにげかくれさせ給ひけり」に相当する。なお、國學院本『咸陽宮』の当該本文は、「しんわうの御前にまいりてはんよきか首をけんさんにいれ地圖をひらきてみせたてまつるところに箱のそここほりのことくなるつるきのありけるをしんわう御らんしてやかてにげんとし給ふ所を荊軻御袖をむすとらへし首のけんをむねにさしあてつゝゑんわう我をつかはしてしんわうのかすめとりし地をかへしてしよこうのうれへをはらはしめんとす今はいかにもたけくま^すしとぞ申ける数百万人の臣下軍兵も手をにぎりむねをひやしあはてさはくはかりにてせんかたなくそみえにける始皇帝のたまはくいまは、や朕^{ちん}かうんめいきはまりのかれんとするにところなしねかはくはしし^のいとまをあたへよ華陽夫人の琴のねをは一たひきゝてのちになんちか心にまかせんとありしかはけいかしはしゆるしけりしかるに始皇帝に三千人の后^{ちん}ありその中にもくわやうふんはならひなきことの上手也けるかいまをかきりとおほしめしひじゆつをつくしてたんし給ふさこそはおもしろかり

けめ荊軻かかうへをうなたれたけきこゝろもやはらきつゝみゝをそはたて聞るたりその時きさき一曲きょくをそうすその歌にはく七尺せきの屏風へいふうはをどりてこえつへし羅穀らこくのたもとはひきて断たうへし鹿廬ろくりよの劔けんは負おてぬくべしとうたひてをしかへしく弾たんじ給ふにけいかはおもしろさに心とろけて聞しらす秦しんわうは聞とかめ給ひて御袖を引きり屏風をはねこえあかゝねのはしらのもとにけかくれ給ひけりである。江戸時代前期に成立したとされる國學院本『咸陽宮』は、明暦二年版『平家物語』「巻五」との直接の書承關係を想定することは難しいと思量される。

江戸時代前期に成立したとされる絵入の物語絵巻・絵入の冊子本の形態をとる『竹取物語』の挿絵の構図は、「竹取物語 正保三年刊（一六四六）」により、『伊勢物語』の挿絵の構図は、「伊勢物語 慶長十三年刊（一六〇八）」によるものが多いとの指摘がある。⁽⁸⁾しかし、國學院本『咸陽宮』の絵の構図は、刊本のそれとは異なっているので、刊本の『平家物語』の製作にかかる絵草紙屋と、國學院本『咸陽宮』とのそれとの關係は認めにくいといえる。

四、國學院本『咸陽宮』の詞書書写者

本節では、國學院本『咸陽宮』の詞書と、國學院大學図書館所蔵『舟のあとく』・『呉越絵』のそれらと比較検討することにより、國學院本『咸陽宮』詞書書写者について考えてみたい。

近年、江戸時代前期の物語絵巻・詞書書写者の実態について、石川透氏が精力的に成果をあげられている。石川氏は、國學院大學図書館所蔵本についても、『竹取物語絵巻』二点（武田祐吉博士旧蔵本及びハイド旧蔵本）の詞書書写者が、埼玉県立歴史と民俗の博物館所蔵『太平記絵巻』、アイルランド国CBL所蔵『俵藤太物語』・『舞の本絵巻』、慶應義塾大学斯道文庫所蔵『竹取物語絵巻』などと同じであること、國學院大學図書館所蔵『武家繁昌』の詞書書写

者は仮名草子作家の浅井了意であること、さらに『住吉物語』(三冊本)の書写者は朝倉重賢であることなども論述されている⁽⁹⁾。針本も、國學院大學図書館所蔵『舟のるとく』・『呉越絵』⁽¹⁰⁾・『張良』⁽¹²⁾及び『羅生門』の四点の物語絵巻の詞書の中の、「それ」・「國」・「人」・「乃」⁽¹¹⁾「代」・「あ」などの文字の崩し方の特徴をふまえて、四点の詞書書写者が同一である蓋然性を述べたことがある⁽¹³⁾。では、國學院大學図書館所蔵『咸陽宮』の詞書書写は、誰か特定できるであろうか。

参考図《『咸陽宮』詞書の書写者》として、國學院本『咸陽宮』と國學院大學図書館所蔵『舟のるとく』・『呉越絵』の冒頭の詞書を掲げてみた。國學院本『咸陽宮』は、『舟のるとく』や『呉越絵』と同じく、料紙の趣向をはじめ、一紙の行数、字数など、江戸時代前期(寛文・延宝期頃)の大型物語絵巻の体裁を有している。また、三つの作品における、「乃」、「代」、「民」、「國」などの文字の崩し方も酷似し、漢字の振り仮名の方法も同一である⁽¹³⁾。

穂久邇本『かんやう宮』の巻末に、「城殿」の印記があり、朝倉重賢が詞書書写者として推定されている⁽¹⁾。國學院本『咸陽宮』も、新作『咸陽宮』を商いした「城殿」なる絵草紙屋の制作になる蓋然性がなくはないであろう。しかし、國學院本『咸陽宮』の詞書書写者は朝倉重賢のものとは断定できない。ただ、國學院本『咸陽宮』の詞書書写者が國學院大學図書館所蔵『舟のるとく』・『呉越絵』のそれと同一であると安易に言うことはできないものの、これら、新作と思量される絵巻の制作に関わる絵草紙屋が存在していたとはいえる。

註

- (1) 穂久邇文庫本『かんやう宮』の翻刻としては、松田存氏(「翻刻」穂久邇文庫「かんやう宮」(上・下二卷))、『二松學舎大學東洋学研究所集刊 第二〇集』(二松學舎大學東洋学研究所 平成元年三月)がある。なお、穂久邇文庫「かんやう宮」には、各巻末に、「城殿」・「城殿」とする壺印に、「城殿泉掾 草紙屋 藤原尊重」とする方印がある(伊井春樹

氏「咸陽宮絵巻」の諸本とその性格」「国語と国文学六九—四」東京大学国語国文学会 平成四年四月)。石川透氏は、絵草紙屋城殿の製作になる絵巻、絵本の詞書書写者と朝倉重賢との関係について、「現在までに知り得た、城殿和泉掾の印記をもつ絵巻物六点のうち、四点は朝倉重賢筆の絵巻物の詞書の筆跡と一致する。城殿和泉掾の箱書をもつ絵巻物の三点のうち、二点は朝倉重賢筆の絵巻物の詞書の筆跡と一致する。合計、九点中六点までが朝倉重賢筆の詞書なのである」と指摘している(第四編 太平記絵巻奈良絵本・絵巻類 第二章 草紙屋城殿の周辺)『奈良絵本・絵巻の生成』三井書店、平成十五年)。なお、針本も、近年、國學院大學図書館に収蔵された奈良絵本『住吉物語』(三冊本)に、「源小泉 大和大極」「烏丸通櫻馬場町 御繪變紙屋 大和大極」の印記があることを報告した(針本正行「國學院大學所蔵の絵入り物語」『中古文学八十六号』平成二二年十月)。すなわち、奈良絵本『住吉物語』(三冊本)は、京都の烏丸通桜馬場町で商いをしていた絵草紙屋「源小泉」によって製作されたものと判明する。この「源小泉」の印記は、現在世界で確認できるものとして、ボストン美術館所蔵『天狗の内裏』、フリーア美術館所蔵『玉藻の草子』など、十점에満たないという(石川氏前掲書「第三編 奈良絵本・絵巻の制作時期と作者」)。

(2) 専修寺本『咸陽宮』の翻刻には、伊井春樹氏「咸陽宮絵巻(翻刻)」『語文 六十輯』(大阪大学国語国文学会 平成五年五月)があり、二松學舎大學本『かんやう宮』の翻刻には、松田存氏「翻刻」かんやう宮(上・下二巻)」「二

松學舎大學東洋学研究所集刊 第一九集」(二松學舎大學東洋学研究所 昭和六三年三月)があり、スペンサー・コレクション本『かんやう宮』の翻刻には、松田存氏「翻刻」スペンサー・コレクション「かんやう宮」(上・下二巻)」「二松學舎大學東洋学研究所 第二二集」(二松學舎大學東洋学研究所 平成二二年三月)がある。本稿は、註(1)で掲出した穂久邇本はじめ上記の諸本の翻刻の成果に拠り、『咸陽宮』の本文校合を試みた。

- (3) 伊井春樹氏は、『咸陽宮』の本文系統について、「一、1穂久邇文庫蔵二巻 2専修寺蔵二巻 3大阪青山短期大学蔵二巻 二、4二松學舎大學蔵二巻 5スペンサーコレクション二巻 6信多純一氏蔵一卷(上巻)」と、大きく二分類を提案されている。また、六点の内容をもとに、『咸陽宮』の内容と物語の展開を「①始皇帝前史 ②咸陽宮の造営と規模 ③烏頭馬角の奇瑞により、燕太子丹帰国 ④田光先生の自刎 ⑤秦への謀反荆軻の企て ⑥高漸離・越呂との別れ ⑦荆軻・秦舞陽、咸陽宮へ赴く ⑧荆軻、始皇帝に剣を突きつける ⑨后の琴の音で始皇帝難を逃れる ⑩燕の滅亡と秦の天下統一」とまとめ、『咸陽宮』の生成過程についても、『和漢朗詠集』(巻下故宮)の源順「咸陽宮之事件」、及び「三

国伝記」(巻二一八)との関連性や、「平家物語」(巻五)「咸陽宮」で、寛一本で示すと、順序はともかくとして②③④⑤⑦⑨⑩とほとんど物語要素の共通することを知らしめると説かれている(『咸陽宮絵巻』の諸本とその性格)『国語と国文学』六九―四(東京大学国語国文学会 平成四年四月)。

(4) 絵巻の詞書本文の問題について、典拠の問題・生成過程論との関係から中本大氏と近本謙介氏の論がある。中本大氏は、『咸陽宮』絵巻の諸本を精査された上で、「諸本冒頭部及び、スペンサー本の長大な後半部を通し、『咸陽宮』絵巻の室町時代的側面を探索してきた。そこには当然室町期における『平家物語』や『太平記』の受容の問題等があり、簡単に結論付けることは難しい。しかし、絵巻の詞章が、「過秦論」や「阿房宮賦」といった「古文真宝」所収の言辭を参照していること、更に、『平家物語』の枠組に捕らわれることなく、「顛瀛蹶項」という新たな史観に裏付けられた壮大な歴史物語に転化させていったことは、学識豊かな製作者と高い教養の読者を想定させ、室町時代後期の物語の中でも一際興味深い作品となっているといえる」と、『咸陽宮』絵巻諸本の詞書本文が「古文真宝」所収「過秦論」「阿房宮賦」の言辭を受けていること、室町時代の抄物である『蕉窓夜話』の「顛瀛蹶項」という史観に裏付けられているなど指摘している(『咸陽宮』絵巻攷―冒頭部の漢籍利用を中心に―)註(2)『語文 六十輯』書収載。また、近本謙介氏は、第一系統本及び第二系統のスペンサー本における「物語化の方法」として、『平家物語』咸陽宮譚を核としながらも、『太平記』自身の持つ『中国史』の枠組をもって物語を構成しようとした享受の在り方は、やはり独自性を保ち得るのではなからうか。『平家物語』と『太平記』に引かれる中国故事の多寡あるいは重みの差は歴然としており、この両書の違いは、『咸陽宮』の依拠資料としての性格に繋がっているといえる」と、『咸陽宮』絵巻における咸陽宮譚は、『平家物語』、『太平記』という享受の中で醸成されたものと指摘される(『咸陽宮』絵巻伝本における物語化の方法―その記述と素材―)註(2)『語文 六十輯』書収載。なお、スペンサー本の下巻が欠落していることについて、伊井春樹氏は、「スペンサー本の上巻は、田光先生の登場でとぎれ、下巻は項羽の咸陽宮攻撃と秦の滅亡の物語が展開する。すると、本来は中巻に相当する部分が不可欠で、もとは三巻ないし四巻仕立てであったと」推定されている(前掲註(2)書収載)。

(5) 伊井春樹氏は、二松本系統の秦舞陽の年齢が十三歳と記述していることについて、「秦舞陽は十三歳であり、『小児』ではあるものの、勇者であるため秦へ送り込むことにしたと説明する。これはまったくの誤伝のようで、『史記』には「燕国勇者秦舞陽。年十三殺人。人不敢忤視。乃令秦舞陽為副」と、十三歳で人を殺したほどの男で、人は恐ろしく正視

できなかったとする秦舞陽は、現在十三歳ではなく、延慶本等でも「十三ニシテ多ク人ヲ殺シテ、燕国ニ籠リケリ」と、殺人事件はあったこととする。それをこの伝本では十三歳としたため、「小児」ながら勇猛であったと補足せざるを得なかったのである。」(前掲註(3))『六十輯』書収載」と、『平家物語』の諸本の問題ともからめて論じている。

- (6) 卷末『國學院大學図書館蔵の「咸陽宮」の構図』参照。なお、寛文十二年版の挿絵は、屏風の前で荊軻と秦舞陽が劍で始皇帝の首を切ろうとしたところを描いている。屏風の左奥には、夫人が椅子に座って琴を弾いている様子が描かれる。また、寛文十二年版『平家物語』は、明暦二年版『平家物語』と同じく、秦舞陽が成人した人物として描かれている。使用画像は次の通りである。

明暦二年版(日本文学資料室九一三・四五〇／H五二)

寛文十二年版(日本文学資料室九一三・四五六〇／一〇一〇二)

- (7) 國學院大學図書館蔵『竹取物語絵巻』(武田祐吉博士旧蔵本・ハイド旧蔵本・小型絵本)の挿絵の構図の特徴について、正保版『竹取物語』のそれとを比較検討したことがある(『國學院大學図書館蔵『竹取物語絵巻』(三本)構図対照』「物語絵巻の本文とその享受に関する総合的研究―國學院大學所蔵本を中心として―」平成二十年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書平成二十一年三月)。

- (8) 刊本『伊勢物語』の挿絵の構図の総合的研究成果として、田中登朗氏編『伊勢物語版本集成』「伊勢物語版本の世界(山本登朗氏)」、「古活字版伊勢物語の世界(高木 浩明氏)」、「伊勢物語の整版本(関口 一美氏)」がある(竹林舎二〇一一年十月)。なお、伊勢物語の古注釈の記述内容と、刊本・奈良絵本・奈良絵巻の構図との関係について述べたことがある(針本正行「伊勢物語絵の表現―國學院大學図書館蔵『伊勢物語絵巻』一九段を中心として―」『國學院雑誌』一一三巻十号 平成二十四年十月)。挿絵の構図の類似性を成立過程の問題とするか、享受のそれとするかは、江戸時代前期の絵草紙屋の実態とも密接に関わるので、今後の課題としたい。

- (9) 石川透氏「第四編 太平記絵巻奈良絵本・絵巻類 第三章 太平記絵巻・絵本の制作」『奈良絵本・絵巻の生成』三弥井書店 二〇〇三年)、「國學院大學図書館蔵の奈良絵本・絵巻」(針本正行編『物語絵の世界』七七〜八六頁 平成二二年)のご論の成果に基づく。

- (10) 『舟のあとく』の解題・翻刻は、針本正行・山本岳史「國學院大學図書館蔵『舟のあとく』と翻刻・解題」(『國學

院大學 校史・学術資産研究 第二号「國學院大學研究開発推進機構 國學院大學 校史・学術資産研究センター 平成二三年三月）がある。

(11) 『呉越絵』の翻刻・解題は、針本正行・山本岳史「國學院大學図書館所蔵『呉越絵』と翻刻・解題」(『國學院大學校史・学術資産研究 第三号』國學院大學研究開発推進機構 國學院大學 校史・学術資産研究センター平成二三年三月)がある。

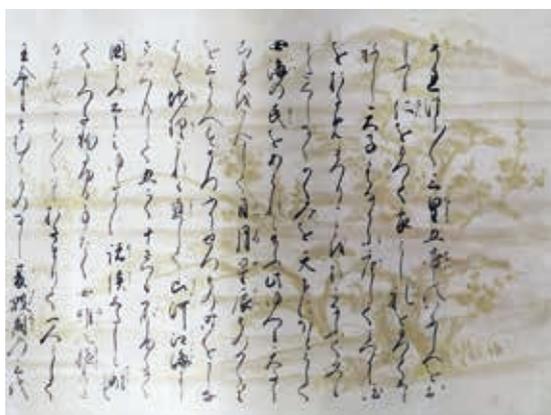
(12) 國學院大學図書館所蔵『張良』二卷(貫一七三九〜一七四〇)。

(13) 國學院大學図書館所蔵の『羅生門』の調査結果として、『羅生門』・『呉越絵』・『舟のるとく』・『張良』、これらの作品の詞書における「それ」・「國」・「人」・「乃」・「代」・「あ」などの崩し方はじめ、料紙、下絵も同一であることを報告した(針本正行・山本岳史「國學院大學図書館所蔵『羅生門』と翻刻・解題」『國學院大學 校史・学術資産研究 第四号』國學院大學研究開発推進機構 國學院大學 校史・学術資産研究センター 平成二四年三月)。

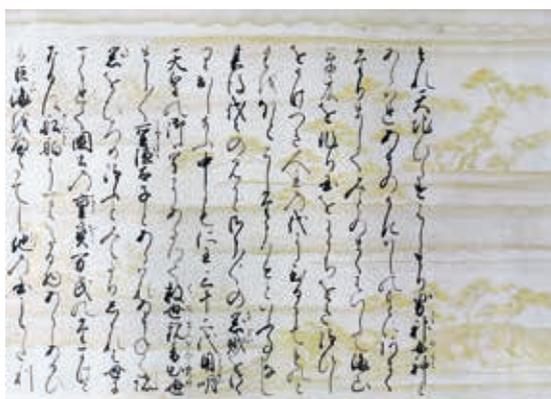
(14) なお、國學院大學図書館所蔵『舟のるとく』挿絵第一図(註10針本論参照)と『呉越絵』挿絵第一図(註11針本論参照)と、今回取りあげた『咸陽宮』の挿絵第一図の構図とが非常に酷似している。上記三作品は同一の絵草紙屋によって制作されたものと思量される。

國學院大學図書館所蔵の古典籍の閲覧・調査にあたっては、館員の方々に多大なご配慮をいただいた。ここに感謝申し上げる。

『咸陽宮』詞書の書写者



『咸陽宮』冒頭



『舟のゐとく』冒頭



『呉越絵』冒頭



『平家物語』寛文十二年版



『平家物語』明暦二年版

『咸陽宮』 翻刻

上卷

それつらく三皇五帝のいにしへをおもふに仁をもつて家とし礼をもつてしとねとし天子其なかに座してみつから徳をおさめまつりことをおこなふて更になたくしなくめぐみを天下にほどこして四海の民をあはれみ給ふ此ゆへに天たうこれをかんしては日月星辰そのめぐりをたかへすうつふうせつその時をうしなはず地理これに應じて山河江海にさいへんして五こく十さいに不じゆくなく國とみたまゆたかに諸侯したしみ朝し

てみつき物たゆる事なく四維八極にいたるまでことくおさまりて一人として王命にそむくものなし夏殷周の三代なをこのみちをまもり徳澤をもつて世をとり給ふところに周の平王の時よりこのかたとくやうやくひするぎみちしたがひてすたれしよとそたかひにそむきうらみてめいぐわいたちまちにやふれてはげうこれよりおこり大なるは小なるをとりひしきつよきは又よはきをしたがへ百姓これかためにあしをそはたて國家このゆへにみたれさはき軍さらにやむ時なししかるに周の世すてにをとろへてせんこくの七雄そはたちおこりくんひやうをまねきたくはへてたかひにそのついへにのらんとす爰に秦のさう

しやうわうの子ゐみなをはせいとそ申ける
とし十三にして位につきしんわうとなり
此年すてにはしよくかんちうの地をう

ちとり周の世をうはひなを天下をひ

とつにあはせておさめんことをはかり兵
をまねぎあつめていくさのひやうちやうは
かりことのしなく夜を日につきておもひ
たくみ給ふこゝろのうちこそ

はるかなれ

(第一回)

しかるにしんわう御としの長するにした
かひて御心ますくたけくわたらせ給ひ呂
不韋といふものを大臣とし李斯といふ

ものを舍人としもうかうわうきへうこう
わうせんなどいふつはものに將軍の官を
なし給ひて軍兵を相そへ諸國につかはし

て城をかこみいくさをいたしせめたゝかふ

てうちしたかへしんわうの手にきふくする

事その数をしらすざるほとにかのせんごく

のしよこうたちその國くのさかひに関を

すへそなへをかたうしてまもりふせくといへ

とも秦のつはものいきほひ日々にたけく

なりてをしよせくせめたゝかひけるほどに

魏のひつばんでうのじやうこうかんのはく

せんせつのちんけいちうそわうゑん王

の六國ことくほろびておもひのまゝに

しんの世ひとつに天下をあはせ四かいをな

ひかししよこうしたかひてうししんわうの

威勢におのゝきおそれすといふこと

なし

(第二回)

かくてしんわうみつからのたまはくちんが徳

すてに四海におこなはれ天下をたなごゝろ
ににきりてさらにおそるゝところなし

上古じやうこの三皇五帝のせいとくにたくらふ

ともいかてかをとるへきすてに今より天

下しんの世にあはせてなを万世ばんせい無窮

ならん秦しんは水徳すいとくにして周しうの火とくを

ほろほしたりこれ朕ちんはすいとくのはし

めなり徳はまた三皇五帝に比すされ

は朕ちんをは始し皇帝こうていと申せとそさため

給たまひけるしかるにしくはうていその心おほ

きにおこり無道むだうにしてなさけなき事

さなから虎狼ころうのごとく也まつりこときひ

しくして人をころし民をあはれむお

もひなしそのころ後才こうさい博学はくがくの儒者じゆしや

とも五帝三王のあとをたつね周公しうこう孔

子しのみちをつたへていまの世のまつりこ

とのいにしへにたかふことをそしりにく

みけるを始し皇帝こうていきこしめして大にいか

り給たまひたゝこれ書籍しよじやくの世にある故ゆなり
とて三墳さんふん五典ごてん史書ししよ経傳けいでんすべて天下

の書籍しよじやくをとりあつめ三千七百六十余

卷くわん一部いぶをも世に残のこさすことくくやきす

てじゆしやと名のつきたるものをは一人

ものこさす驪山りさんといふ所にとらへあつめ

て大なる穴あなをほらせその中につきおと

しいきなからうつまれけるこそあさ

ましけれ

(第二回)

さるほとにしんの始し皇帝こうていすてに六國を

あはせたいらけ給たまひ咸陽かんやうと云ところを

みやことさため給たまふ東南とうなんにはかんこくしかうの

けはしきに関せきをすへ西北せいほくにはこうがけい

ゐのふかきにそなへをかまへたれは一夫いつふこ

れをふせく時は百万ひゃくまんの軍兵ぐんべいもせめいるへ

きたよりなしその内にめぐり三百七千
里高さ三里の山をつきてこれを九重ぢゆう

にたゝみあけ口六しやくのあかゝねのはし
らをたて天にくろかねのあみをはり四

方にあかゝねのついちをつきたかさ四千

丈にかまへたり秋はたのものかりかねのみな
みをさしてらいひんし春はこしちにたち

かへりつはさのいきほひさはりありとて

ついちにくろかねの門を立てかりのゆき

かふ道をあげつゝこれをがんもとそ名つ

けゝる又四海の間に宮門きやうもんけいごのぶしの

ほかには兵具ひやうぐをもたしめすそのほかのき

うせんひやうぢやうはひとつものこさすとり

あつめてこれをやきすてそのくろかね

をもつてたけ十二丈の人形にんぎやうその数十二

人いさせてゆうきんもんにてたてられけ

るついちの中にはせんてんのむねかす四

十六あり後宮こうきやうのむねかす三十六あり

千門ちもん万戸まんことをりひらきろうよりろうに

いたりかくよりかくにつたふてたんちせう

はうすてに花をかさり玉をちりはめた

り長生殿ちやうせいだんのまへにはしやくしんしゆのいさこ

をしきひやくるりの玉をならへ不老門ふらうもん

のうちにはこかねをもつて日輪にぢりんをつくり

しろかねをもつてくわちりんをつくりて

空の間にかけられしんわうのきよくたい

とこしなへにしてをとるへ給はさらんこと

をは松竹のときはなるになそらへ始皇

のことふきのいつまでもたえさらんことを

つるかめのよはひによそへてすゑ久し

からんとしゆくし奉りけりこと更に目

をおとろかしきもをけしておひたゝし

くみゆるはくうてんの数おほき中に

阿房殿あほうでんと申すは始皇しはうつねに出御しゆつぎよなり

て政事せいじおこなひ給ふところの御殿也

とうさいへ九町なんほくへ五町そのたかさ

三十六丈なり上にはるりの瓦かはらをふきて
 糸んわうつねに爰にすむかとあやしまる
 ほうのいらか雲にかけりてきうぜうの
 かくをまつにたりこうのうつはり空に
 かゝりてはれてんのひかけにかゝやきめ
 なうのとほそにはしやこのみずをかけ
 しんしゆようらくをたれこはくのらんかん
 にはびやくごんのこしりをみかきさんこ
 のたるきすいしやうのかべたいまいの
 かきにしきのしとね庭にはには四季きのけいを
 うつし池にけきしゆの舟をうかへ玉のいさこ
 えいてつし花とはなどは色をあらそひえ
 たと枝とはひかりをあはせりんほうつら
 なりくわえうしけりかいたつきよくしや
 しなくにわかれたり後宮こうきうの女御じよごかういそ
 のかす又おほくしんわうのあいかうをま
 ちててうせられんことをもとむあしたに
 かゝみをたてゝおもてに脂粉しふんをほどこ

すはれてんのほしの雲にみゆるかとあや
 しまるかみをけつるくしのをとせうく
 として雲にひゝきらんしやをたくけふり
 のすゑはよこたはりてかすみにいたりし
 ふんせいたいをあらひすつればけいゑの
 水はさなからなかれをにこらかすかゝるお
 ひたゝしきかんやうきうのうちに始
 皇つねにたのしみをきはめ給ふ

くわほうのほどこそ

ゆゝしけれ

(第四回)

そのかみ燕えんの太子丹たいしたんはしんの始皇帝
 のために人しちにとられていましめを
 かうふりものうきかんやうのたびのすま
 ひきのふけふとすくるほどにやうやく十二
 年をそかさねけるある時太子丹しん

わうにいとまの事をそうもんせられけ
 るやうはわれ故郷ゑんの国によはひかた
 ふきたる母をのこしていまこの咸陽かんやう
 にと、められたりさこそは母のなけき給
 すらんねかはくは今一たひ故郷にゆるし
 かへされて老たる母に見えもし見もし侍
 らは何事のよろこひかこれにまさらん
 やしからはこの大恩にはなかくしんわう
 の臣下となりてみつき物を奉り後
 代までもしたかひ奉るへしと涙と、もに申
 されけり始皇帝は聞しめてあさわ
 らひてのたまはくなんちにいとまを給
 はり故郷にかへさん事は馬に角つのおひから
 すのかしらのしろくならんときをまつへ
 きなりとそのたまひける太子丹大に
 うれへなけき天にあふきてかなしみ地に
 ふしてはなみたをたれつ、ねかはくは角つのお
 ひたる馬を生しかしらのしろきからす

をあらはして故郷にかへして給はれとかん
 たんをくたきていのられたり天道も
 さすかにかうくの心さしをかんし給ひけ
 るにや角おひたる馬ありて宮中にき
 たりかしらのしろきからすありて庭てい
 上のうへ木にすみ侍りけり始皇帝
 このきとくにおとろきりんけんかへらさる
 ことはりにまかせてすなはち太子丹を
 故郷にこそかへされけれ始皇帝猶も
 これをくやみおほしければ秦しんと燕えんとの
 間に楚そと云國あり此国に大河なかれ
 たり河に橋はしをかけたりける始皇帝
 さきに官軍くわんぐんをつかはし太子丹この橋はし
 をわたらんとし川中にいたりておつる
 やうにこしらへたり太子丹は此事夢にも
 しらすして故郷にかへるうれしさに夜を
 日につきてゑんの国へといそかれたり
 やうくそこの地におもむきいたりてか

のはしにさしかゝりわたらんとせしところにかねてこしらへわたしけるおちはしなれば

なとかはこらふへき川中にておちいり

けりされとも太子丹すこしも水にはおほれするくちをふむかことくにおほえてむかふのきしにそあかりける立かへりて是をみれば大小の龜ともいくらと云数しらす水のうへにうかひあつまり甲かづをならへてはしとなしその上をこそとをしけ

れかの天上の牽牛星けんぎうせいは七月七日に

銀河ぎんがをわたればうじやくむらかりて羽はをならへ橋となしてこれをわたすこの

糸んこくの太子丹はそこの川におちいりしを龜おほくあつまりて甲かづをならへ

てはしとなしむかふのきしにわたせし事

これもひとへにたいしたんのかうくのころさしを天たうあはれみ

給ふかゆへなり

(第五回)

かくて太子丹はことゆへなく故郷にかへりて母にたいめんをとけ給ひかうくをつくし侍りけり臣下以下の人くことくく

あつまりてよろこひいさむありさま死

したるものゝふたゝひよみかへりし心ちして

たくひなくそおほえけることはりなるかな

龍のひけをなてゝのまれさるかことく虎の

尾をふみてくらはれさるよりもあやうく

なさけもしらぬしんわう虎狼ころうの手をのか

れて二たひ故郷にかへられける太子丹の

心のうちおもふもなをあまりありかたるに

ことはもたらさるへし太子丹なをもしん

わうにもしたかはさりしかは始皇帝大

にいかりて官軍をさしつかはして

糸んの国をうたんとす太子丹此事を

つたへ聞て大におとろきいか、せんと案し
 けれども國ちいさくて兵すくなしさらに
 ちからのをよふところにあらずさるほとに
 しんの国よりは日々につはものを山東さんとう
 に出して齊楚三晋せいそしんをうちとりあまた
 の城をせめおとししよこうをしたかへ
 なひかしてやうやく燕の國にちかつ
 かとす太子丹ますくうれへおそれ
 て臣下鞠武きくぶといふものに此事いか、す
 へきとたつねらるきくふこたへていはく
 それしんの地はあまねくひろうして韓かん
 魏趙きでうの諸國をうはひとり北のかたには
 かんせんこくこうのかためありみなみのかた
 にはけいゐのなかれ底そこふかくはかんの水
 みなきりおつ右にはろうしよくの山そ
 はたちたかく左にはかんかうのけはしき
 せつしよあり民おほくしてつはものつ
 よし燕はまことに小にしてちから足たら

すしんにむかひて敵てきせん事たとへはかい
 こをもつてはんしやくにあたらんかことし
 今臣これをおもふに君ねかはくはまづ
 しんにしたかひて始皇帝の心をなため
 後にかさねておほしめし立給へ爰に
 しんの国の大將軍はんよきと云も
 のは聞えたるつはものにて力人ちからに
 すくれはかりこと世にこえたりしかるに
 この者すてに秦王の心にそむき身をか
 くすへきへきところなくしんの國をにけさ
 りていま此兎んの國にきたれり君
 これをめしか、へてやしなひ給ふ秦王こ
 れを聞給は、いよくいかりをふくみつ、
 えんをうたん事めのまへにありたとへは
 にくをになふてうへたる虎のほとりにた
 てらんかことしわさはひかならずのかるへから
 すとひくわんちうあんえいかともからは
 かりことをめくらすと云ともさらにかなふへ

からすねかはくははんよきをはまつ此国を
いだしやりてきて其後ひそかに事を

くはたてにしのかた三晋さんしんに心をあはせみ

なみのかた齊楚せいその国にくみし北のかた

けうどをかたらひてつはものをもよほし

ひかしのかたしんの國をせめなは本意ほんい

をとくへき事もこそと申ければ太子

丹のたまはくいま大臣のはかりことさら

にのびくにしてきうならす只おそらくは

一時の間にこのいきとをりをさんし

侍へらんことをおもふしかるにはんよきはしん

の国に身をかくすへきたよりなく我を

たのみて此國にきたれりたとひ秦

のためにほろほさるといふともいかてか此

人を見すつへきこれまことにわかうんの

す系なるへしときくふかさねて申ていは

くそれあやうきをおこなふてやすからん

ことをもとめわさはひをなしてさいはひ

をえんとおもは、これはかりことあさくし
てうらみは又ふかゝるへし君とはんよきと

た、一たんのましはりをもつて國家の

大なるかいをかへりみ給はすこれうらみを

たすけてわさはひをまねくといふもの

なりされは鳥の毛けをもつて炭火すすびの

上にをかはやかれん事さらにかたから

すましてやしんのいきほひはわしの

ことくらのことしゑんはよはくして

すゝめのことくねずみのごとしはなはた

ほろひやすかるへし爰こゝに此國こゝに田でん

光先生くわうせんじやうとてかくれなくつはものあり

ちゑふかうしてこゝろたけくはかり

ことありてわたくしなし此上にはちから

なし此人をめしてともにはかりことを

めくらし給へとてすなはちてんくわうせ

むしやうをよひよせたいしたんすてに礼れい

義ぎをいたしたいめんをとけねんころに

かたらひて頼むよしをその給ひける

(第六回)

下巻

でんくわうせんじやうやゝありて申ていはく
 それ騏きといふ馬はそのさかりなる時には
 一日に千里をゆくといへとも年おひてを
 とろへぬれば驚馬どばにたにをよはずといへ
 りわれむかしわかゝりし時は弓をひき
 ほこをふるに敵てきをうつことやすかりけり
 いまはよはひかたふきちからをとろへ精せいきえ
 てはかりことうすしされともわかおもふ事
 あり爰こゝに荊軻けいかといふものありもとは衛ゑいの
 国の人なり今この國にうつりきたりつ
 ねにこのみて書をよむ又高漸離かうぜんりといふ
 ものありよくを筑つくをうちてかくれなき名

人なり筑ちくは琴ことに似て絃せんあり竹たけをもつて
 これをうつにおもしろき声こゑありといふ荊軻けいか
 とつねに酒をのみましはりを結びてしたし
 くあそふしかもこの二人ともに智ちふかく心たけし
 このゆへに我又したしみましはりて
 あひかたる事へたてなししかるにそれ
 かしつらく太子丹のひんかくをみるに
 いつれもとらぬようしやなれとも秦に
 つかはすへき人なし夏扶かふといふ人はけつ
 ようのものにてそのいかる時はおもてあかし
 宋意そういといふ人はみやくようのものにて
 そのいかる時はおもてあをし武陽ぶやうはこつ
 ようのものにてそのいかる時はおもての
 色しろし今それかしのましはるところ
 かの荊軻けいかと申すものはこれしんようの人
 にてそのいかる時もおもての色さらにへ
 むせすこの人にすきたるものあるへからす
 ねかはくは君これをめして秦しんのつかひ

につかはし給へかしと申す太子丹聞給ひ

てさらは先生せんじやうよひてきたり給へとあ

り田光先生てんくわうせんじやうかしこまりてまかり出た

り太子丹をくりて門に出て先生の

袖をひかへてさゝやき申されけるやうい

ま此事はすてにこれ國の大事なり

あなかしこ又よの人にかたり給ふなどあり

しかは田光うけ給はるとてうちわらひ

て出たりかくて荊軻かもとにいたりて

かたりていはくわれとなんちとましはり

ふかき事この国にかくれなし今太子丹

それかしかわかゝりし時のことを聞給ひ

てわか今年かたふきてをとろへたる事

をしろしめさす宮中にめされて頼み

給ふやうゑんとしんと両こくさためて

立へからすつゐにはしんのためにはろふへし

ねかはくは此はかりことあらはなすへしと

の給へりそれかしすてにとし老たりさいは

ひになんちの事を太子丹にかたり侍へり

いそきめしてはからひきかんとのたまへり

すみやかに太子丹のもとにゆくへしと荊

軻聞ていはくこの事いま先生の口

より出てわか耳にいれりこれかならず

大事なりと田光かいはくされはに世に

名をおしむものは人のためにうたかはれさ

るをもつてさきとす太子丹われにつけて

いはく此事は國の大事なりあなかしこ

又よの人にもらすなといへりこれは太子丹

のわれをうたかふ所なりわれうたかはれて

又なにの生たるかひあらんわれ死して荊

軻か心をはけまさんなんち太子丹に行

てわれすてに死せりこれ世にもらさゝ

るところのしるし也と申せと云てみつ

からくひをかきおとしてむなしくなり

けるこそあはれなれ

(第一回)

かくて荊軻はわか家をたち出て、太子丹のもとにゆきて對面をとけたりさても田光先生はそれかしのもとにきたり君のもらすなどのたまひけること葉のすゑもはつかしくさこそは我をうたかひおほすらんそれ人の世にあるものはおしむところは名にあり人にうたかはれ侍りては世になからへて何のかひあらんいまわれ死して君の心をさんせんといふてみつからくひはねて死せりとかたりけはたいしたんだにおとろきなけき給ひていはくわれ先生にむかひてあなかしこ此事人にもらすなといひけるは大事のはかりことの成就せんかため斗の事そかしいま先生の又こと人にもらさゝるしるしにとて死し侍へる事これわか本意なら

むやとてなみたをなかしてかなしみくやみ給ひけりや、ありて太子丹なみたをなかしてかなしみくやみ給へる中にけいにかたりてのたまはくすてにわがふせうなることをしらすして田光先生いま公をわれにすゝめてましはりをむすはしむ公ばかりことをめくらさはこれ天たうのゑんの國をあはれみて我をすて給はさるしるし也しかるにしんわうは利をむさぼる心ふかくしかもそのよくきはまりなし天下の地をことくくうちとりあらゆる大わう諸侯をみなわか所にしたかへみつきものをおさむるにいたらすはしんわうの心さらにあきたるへからすしんすてにかんわうをいけとりその國をうはひとり又なをみなみのかた楚こくをうち北のかた趙の國にをしよすわうせんといふ將軍は数十万のつはものをもつて

しやうげうの地をふかき李信りしんと云將軍
は大原雲中たいげんうんちゆうより出てせめかゝるでう

こくさらにふせきたゝかふにたよりすみ

やかにうちまけてしんわうの臣下とならん

でうすてにほろびなはこのゑんの国

いかてかさゝへんこの国は小にしてしかもつ

はものすくなし今はかりみるに一國の

老少み出むかふともしんのつはもの

かすにはをよふへからすとひしようを

かたらふとも又みなしんにしたかひかた

ふきてわれにくみする諸侯しよこう

これあるへからす公此事こうじ

いかゝ思ひ給ふ

とぞ

かたられ

ける

(第一回)

荊軻けいこつらくうち聞く是はまことに

きはめたる大事にて侍へりかりそめに

りやうしやういたすへき事にあらすといへ

ともそれかし今此事をおもふに世のつ

ねのはかりことをもつてはたやすくう

かゝひがたししんわうは大よくぶたうして

たからにあくこなし今君おもきたからを

もつてしんにをくり給へそれかしつかひと

してしんにおもむき大わうをとらへてお

ひかし日ころうはひとりたるしようの

地をもとりかへし君の心をもやすめ

たらんむかし魯ろの曹さうが齊せい味のくわんこう

をとらへてたいじやうさせしことくなるへし

もししんわううけこはすはすなはちこれ

をさしころすへしかのしんしんのよき大將

軍はみなはうぐにわかちつかはして

國のうちに残るともからはさらに物の数に
あらずさためてはかゝしき事はよも

これ有へからずそのうちに君すなはちしよ
こうをかたらひくみして大軍をおこし

しんの国にとりかけ給は、しんはほろひ

やふれん事何のしさいもあるへからすと心

やすけに申けり太子丹大によるこひ

此うへはともかくも國の大事はまかせ侍へら

むとてそれよりは荊軻をもてなしかし

つき給ふ事さらにそのたくひなし禁きん

中ちゆうの上しやうでん殿でんにいざなひいれつ、太子丹み

つから大牢たいらうのそなへをと、のへ山海の珍

物をそろへみめよき女房あまた相そへ

榮えようえいくわにほこらし荊軻を

なくさめ給ひけりある時荊軻あそひ

のためにとうくうの庭に出て池のほとり

におもむきけり太子丹おなしく出給ふ

あまたの女御かうい御ともにめしつれ

らる池の中に大なる龜のうかひ出し

をけいかすなはち磔つはてをとりあけてうち

けるを太子丹見給ひてやかてこかね

の玉をとりよせみつから荊軻にさ、け

あたへてうたしめらる又太子丹にひさう

のりうめあり一日千里をゆくといふ

けいかこれをみていふやうりうめのきもは

あちはひきはめてうまきものなりといへ

りければ太子丹やかてその馬をころし

てきもととりてあつものにして荊軻

にこれをす、めらるそのおこりかくのことし

か、る大事をおもひたちて荊軻か心を

とり給ふ太子丹の心のうちおもひはか

りていたはしくも又あはれにそおほえける

(第三回)

やう／＼かくて日かすをすくれとも荊軻さ

らにしんにゆかんとする心なしその間も
 しんのしやうくんわうせんすてにでうの
 国をうちやぶり王をいけとりて地をう
 はひなをつはものをすゝめていまはゝや
 糸のみなみなる國さかひまでせめよせ
 たり太子丹おそれ給ひてけいかにか
 たり給はゝしんのつはものすてにこの
 国にちかつくと聞えたりもし易水えいすいをわ
 たりなはくやむともふせくともそのしる
 しあるへからすねがはくは公こうすみやかに
 はかり給へと荆軻けいここたへていはく君のこと
 葉なく共われさらにをこたるへからす爰に
 はんよぎしやうぐんはこれつみをしんにかう
 ふれりしんわうふかくにくみおそれてはん
 よぎといふものをいけとりても又はくび
 をとりてもきたらんものには黄金わうこん千
 斤ならひに一万戸にのくにをあたふへし
 とふれられたりもしはんよぎかくびと

糸んの國の地圖ちずとをもちてしんわう
 に奉らは王よろこひてそれかしに對
 面し給はんその時しんわうをとらへて
 たいじやうせさすへしと太子丹の給はく
 ともかくも公こうのはかりことにまかすへし
 と荆軻すなはちはんよぎかもとにゆ
 きてかたりていはくそもくはんしやう
 くんの事しんわうふかくにくみ給ふすて
 にいま故郷の父母けんそくみなことく
 くころされなを其うへにしやうくんを
 うちてくびをとりてまいらせんものには
 黄金千斤ならひに万戸の国を給はらん
 とふれられたりいかゝいまはおもひ給ふと
 はんよぎ天にあふぎ大そくしてなみたを
 なかしていはくわれつねにしんわうをうら
 みおもふ事こつすいとをりていふはか
 りなしといへともいまさらいかにともすへき
 たよりなしと荆軻かいはくわれにひとつ

のはかりことありこれをもつてゑんのう
れへをはらふへし又將軍のうらみをも
とき侍へらんねかはくはしやうくんのくひ
を給はりてしんわうに奉らんしん王か
ならずよろこひてわれにたいめんすへし

その時われひたりの手にしん王の袖
をとらへ右の手に劔をとりてその胸
をさしてころさんしからはしやうくんの
うらみをもさんしゑんのうれへをもはら
はんとこゝにはんよきみぎのかたをかたぬ
きひたりの手をもつて右のうでくび
をにきりゐたけたかになりていはく
これこそそれかしかよるひる思ひめくらし
はをくひしはりむねをこかすところな
れしんわうをたにころさはわか命は
おしからすとてみつから劔をぬき

くひかきおとして

これをさゝけ

荊軻にこそ

あたへ

けれ

(第四回)

けいかははんよきか首をとりて太子丹
のもとに立かへりけりたいたんだに
かなしみなき給ふさてそのくひを箱
におさめかたくこれをふうしてをかれた
り燕の国中によき劔をもちたるも
のやあるとたつねらるゝに趙人徐夫人と
いふもの匕首の劔をもちたりその長
一尺八寸劔のかしら匕ににたれば匕
首のけんとその名付けたるならひなき名
劔なれば百斤のこかねをもつて買取
毒をもつてけんのつはにぬりて科人
をさして心みるに身より血の出る事

糸すちをひたすほとなれば立どころに
死すすなはちこの劍をはゑんの地圖

のしたにかくしたり爰に又ゑんの国

にしんふやうといふつはものありことしわ

つかに十三歳なれとも人をころすにこれ

にてきするものなしちからつよく心たけし

かゝる大事にのそみてかやうの小児をつ

かはすへき事にはあらねともこゝろたけき

ようしやなるゆへに荊軻にそへてつかはさる

かくて荊軻秦舞陽はんよきか首

ゑんの地圖をとりもちてしんをさし

ておもむきけり太子丹をさきとして

かうせんり以下の人々その事をしりたる

ともからをのくしろきしやうそくして燕

の國のみなみの易水のほとりまで

道祖のをくりをいたされたり酒もなかは

なる時に高漸離座を立て筑をうつ

荊軻和して哥をうたふに變徴の

てうしをしらふるその哥にいはいく

風簫々として易水さむし壯士一たび

さりてまたかへらず

と此歌をうたひてしはらく筑をうちけ

れは變徴のこゑにかんかいしてをのく

なみにむせひけり又調子をひきかへて

羽のこゑをしらへしかはをのくこれにかん

おうして目をいからかしひちをはりかし

らのかみそらにたちて冠をつらぬきたけ

くいさむありさまいかなるしんのたけき

國もほろひぬへくそおほえける

(第五図)

時すてにうつりければ荊軻しんふやうは

座をたちてしんをさしておもむく太子

丹はなこりおしみて車のかけのみゆるは

かりはるかに見をくり給ひけりかくて太

子丹そらをあふきて見給ふに白虹たちて
日をつらぬくとをりえすこの天變てんぺん

さらに本意ほんいをとけかたしと頼みすく

なうそおほしけるやうくけいかしんの

國にいたりつきしんわうのてうしんに中ちゆう

庶子しよもうかといふものにたからをあたへ

てしんわうにいはせけるはゑんわうまこと

に大わうの威勢をおそれさらにつはもの

をあけててぎせんことをおもはずねかはく

はしんわうの臣下とならん年ことのみつき

ものをたてまつりてさらに仰にそむく

へからすこのゆへにはんよきか首をきり

ゑんの地圖をさゝけてまいれりと申

さするにしんわう大によるこひ給ひてた

いめんせんとありければはいかはんよきか

首をいれたるはこをもちしんふやうは地

圖のはこをさゝけてかんやうきうのきざ

はしをのほるにしんふやうしきりにあ

しふるひわなゝきてのほりかねたるあり
さまなりはんの者ともこれを見て内に

野心をふくめはこそあしふるひておそるゝ

らめのほすましとひしめきけり荊

軻わらひていはくゑんはまことに片田舎かたみなか

にてかゝるきれいくわう大なるとこには

見なれすみなれたる事なしされは心

のをくれたりやといひければけにもとて

とをしけりしんわうの御前にまいりて

はんよきか首をけんさんにいれ地圖

をひらきてみせたてまつるところに箱

のそこにごほりのことくなるつるきのあり

けるをしんわう御らんしてやかてにけん

とし給ふ所を荊軻御袖をむすとと

らへ七首のけんをむねにさしあてつゝ

ゑんわう我をつかはしてしんわうのかすめ

とりし地をかへしてしよこうのうれへ

をはらはしめんとす今はいかにもたけくす

ましとそ申ける数百万人の臣下軍兵も
手をにきりむねをひやしあはてさはく

はかりにてせんかたなくそみえにける始

皇帝のたまはくいまは、や朕かうんめい

きはまりのかれんとするにところなし

ねかはくはしはしのいとまをあたへよ華

陽夫人の琴のねをは一たひきゝて

のちになんちか心にまかせんとありしか

はけいかしはしゆるしけりしかるに始

皇帝に三千人の后ありその中にも

くわやうふにんはならひなきことの上手也

けるかいまをかきりとおほしめしひじゆつ

をつくしてたんし給ふさこそはおもしろ

かりけめ荊軻かかうへをうなれたたけき

こゝろもやはらきつゝみゝをそはたて聞

ゐたりそのときさき一曲をそうすそ

の歌にいはく

七尺の屏風はをどりてこえつへし羅

殺のたもとほひきて断へし鹿廬の
劔は負てぬくべし

とうたひてをしかへし弾じ給ふにけ

いかはおもしろさに心とろけて聞しらす秦

わうは聞とかめ給ひて御袖を引きり

屏風をはねこえあかゝねのはしらのもと

ににけかくれ給ひけりその時けいか大に

いかりて匕首の劔をなけかけたりおり

ふし御前には番の醫師夏無且

といふもの薬のふくろをなけかけたり

匕首のけんはくすりをかけられながら口

六尺のあかゝねのはしらをなかはこそ

きりこみけれその時始皇帝劔をぬ

きて荊軻をきり

八さきにし給ひけり

しんふやうも

うたれぬ

(第六回)

始皇帝大にいかりて王翦李信などいふ

將軍に数百万の兵をそへてゑんの国に

せめよする太子丹もちからなくよきつは

ものをもよほしてりやうとうといふ所

にいだしあはせふせきたゝかふといへ共

つるにうちまけてゑん水のほとりにし

てうたれ給ひけりかの高漸離は名をかへ

てかくれゐたりしを尋いたし筑をうつ

事の上とて馬糞にふすへて目を

つぶし始皇のそはにゆるしをかれつね

は筑をうたせて聞しめしけるをなをも始皇

をうらみつゝ筑の首になまりを入て是にて

うちころさんとしけれ共それもうちはつして

ころされぬ天運つよき皇帝のくわほうの程こそ

めてたけれ